

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（特別研究・一般研究）

研究代表者 所属・職名 臨床・健康教育学系

氏 名 小林 優子

研究期間 平成30年度～平成31年度

(令和元年度)

研究プロジェクトの名称	「学校実習におけるアクティブラーニング型授業の情報保障に関する研究」
研究プロジェクトの概要	<p>本学独自の、教育職員免許取得プログラム（免P）制度を利用する学生は毎年約100名程度おり、大学院生の約3分の1が免P制度を利用している。また本学では、特別支援学校教員免許の取得を希望する障害学生が入学している。その多くは聴覚障害学生であり、ここ5年間では1学年あたり平均1～2名ほど在籍している。免P学生の必修科目の中に、学生自身が教員役として同級生を児童・生徒に見立てて模擬授業を行う授業がある。聴覚障害学生は健聴学生に交じり、自身が教員役または児童・生徒役として授業に参加する。これにより、健聴学生との交流を図る機会が設けられる一方で、情報保障に関する様々な課題が生じている。今回は「教育実地研究Ⅱ」という授業で複数回行われる模擬授業を中心に分析し、聴覚障害学生と健聴学生が混在する条件下でコミュニケーションを行う状況下での情報支援の課題について検討を行う。</p>
<p>研究成果の概要</p> <p>※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。</p>	<p>教育実地研究Ⅱにおける模擬授業形式の4回の授業をビデオにて記録し、手話通訳における翻訳のタイムラグの量的・質的分析を行った。その結果、1回目に比べ2回目以降はタイムラグの合計が減少しており、その理由として学生と情報保障者との発話内容も含めた授業内容の打合せの実施や、生徒役の健聴学生のコミュニケーション方法の変容による影響が示唆された。健聴学生も本授業において初めて手話を主なコミュニケーション方法とする聴覚障害学生に接したため、最初はぎこちない様子が見られたが、回数を重ねるにつれ通訳を介さずともやり取りが成立する場面も見られるようになったことが理由として考えられる。</p> <p>一方で授業時間のうち約20%弱は翻訳によるタイムラグを占めていたことから、聴覚障害学生が模擬授業を行う上で授業展開の工夫や時間延長などの配慮も必要と考えられた。また、授業内容が専門的になると、通訳者にも専門知識が必要になるため、人材確保が課題として考えられた。</p>
研究成果の発表状況	<ul style="list-style-type: none"> ・全国高等教育障害学生支援協議会（AHEADJAPAN）第5回大会 ポスター発表 「教員養成系大学における聴覚障害学生への授業支援と課題」 小林優子 酒井悟
学校現場や授業への研究成果の還元について	学校現場における研修会、および大学の学部や大学院における授業において本研究の成果を公表する予定である。

【提出期限】 令和2年3月31日（火）：厳守